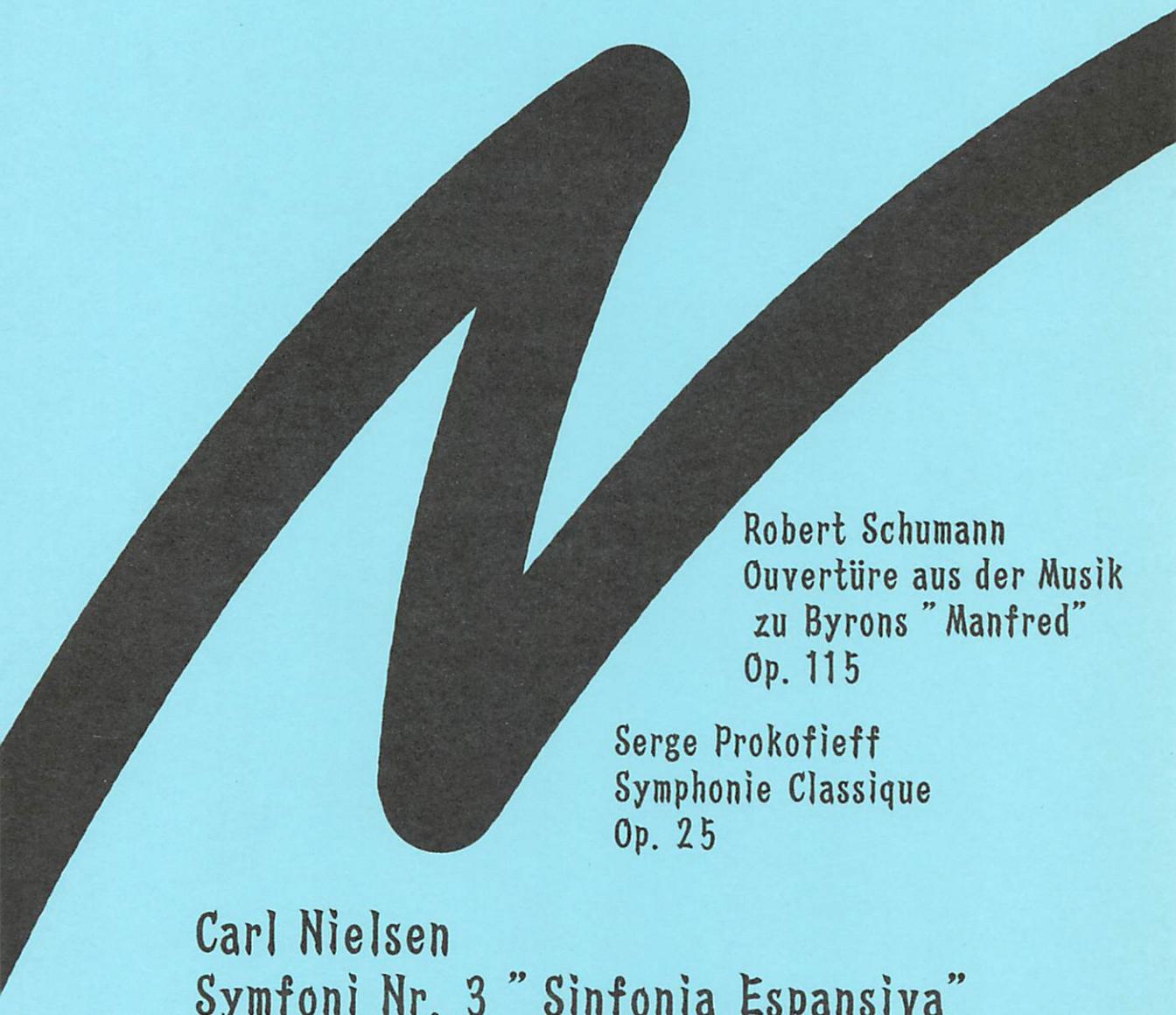


Philomusica Orchester Kyoto



Robert Schumann
Ouvertüre aus der Musik
zu Byrons "Manfred"
Op. 115

Serge Prokofieff
Symphonie Classique
Op. 25

Carl Nielsen
Symfoni Nr. 3 "Sinfonia Espansiva"
Op. 27

京都フィロムジカ管弦楽団
第13回定期演奏会
2003年6月1日(日)
長岡京記念文化会館

🎵ロビーコンサート🎵

①カール・ニールセン／木管五重奏 Op.43 より 第2楽章 メヌエット

江藤 (Fl) 中西 (Ob) 田中 (Cl) 田中 (Fg) 片山 (Hrn)

1922年、交響曲第5番を完成させた後に作曲された、緊張と迫力の第5番とは正反対のくつろいだ、音楽の楽しさを素直に表明したかのような微笑ましい曲。今日の演奏会のメインはニールセン... ということで、木管五重奏の代表作の一つであるニールセンの木五、お楽しみください。

②アントン・ブルックナー／合唱曲「エッセイの若枝は花開き (Virga Jesse)」

遠藤、渡辺 (Tp) 山下、谷口 (Pos) 塚田 (Tub)

この作品は1885年というブルックナー円熟期に書かれた合唱曲です。第7交響曲や『テ・デウム』の完成直後、第8交響曲の作曲中の作品で、この時期のブルックナー作品らしい、大胆な休止と効果的な強弱の変化が見られます。曲想も変化があり、壮大な印象を与える力強さに満ちた小品です。

③ジョアッキーノ・ロッシーニ／チェロとコントラバスの為の二重奏曲ニ長調 より

奥田真 (Vc) 今城 (Cb)

④カール・ニールセン／「弦楽のための小組曲 イ短調 FS6(Op.1)」より

"Finale" : Andante con moto · Allegro con brio · Piu mosso

天澤、越後、田村 (Vn. I) 西村、川島、須賀 (Vn. II) 篠崎、瀬尾 (Va.) 小野田、星 (Vc.) 名坂 (Cb.)

記念すべき作品番号1を与えられていますが、実際は弦楽四重奏第1番、弦楽五重奏に続いて作曲された曲です。弦楽合奏のレパートリーとしてはよく演奏され、その叙情性から親しみやすいものになっています。前奏曲-間奏曲-終曲の3部からなりますが、本日は終曲のみを演奏します。

弦楽のための作品としては他に、交響曲第3番の直前に作曲された沈痛な様相を漂わせる「若き芸術家の棺の傍らで FS58」や、晩年独特の素朴で美しい「ボヘミア=デンマーク民謡によるパフレーズ FS130」を作曲しています。

地域の皆様の健康で快適な生活を応援し続けます

けいの 太陽堂グループ

本部 舞鶴市字福来1111の2

TEL 0773 77 2710
FAX 0773 77 2766

曲目解説

オーケストラのコンサートの面白い聴き方のひとつに、さまざまな作曲家がどのようにオーケストラを扱っているか、その手法の違いを楽しむ、という聴き方がある。本日のプログラムは、そうした聴き方をするにふさわしい、個性的な作品の取り合わせである。

1曲目の『マンフレッド』序曲を作曲したシューマンは、オーケストラの扱いが下手だと思われがちな作曲家だ。弦楽器も管楽器もべったりと重ねられている部分が多く、響きに変化がなく野暮ったい、と評価されることが多い。

もともと、そうした効果を狙わない素朴な響きは、傷つきやすく純朴なシューマンの人柄そのものの表れとも言えるのではないか。そのような内向的な性格の持ち主だったシューマンにとって、パイロン作の『マンフレッド』は共感できるテキストだっただろう。

『マンフレッド』は、過剰な自意識にさいなまれる主人公マンフレッドの苦悩の物語である。彼は並外れて優れた知性を持つがゆえに苦しいほどにまで自己の内面を見つめずにはいられなくなり、さらに、諸人と自分との違いを強く意識したマンフレッドは他人とは没交渉で孤独であった。唯一の理解者と言える恋人がいたが、道ならぬ愛であったため結局は恋人を死に追いやることになりマンフレッドは罪悪の念に駆られる。苦しいまでに強い自意識と孤独と罪悪感とを背負ったマンフレッドだが、富や権力を与えようとする精霊たちの誘惑や、神による救いを勧める聖職者の説得をことごとく断つてしまう。そしてマンフレッドは自らの力で死を得ることでようやく苦悩から解放される。

シューマンの作品はロマン派前期の作品としては珍しくトロンボーンが重要な役割を果たしているが、これはシューマンがトロンボーンを幻聴に聞いていたためだという説がある。もしそうであるならば、分厚く重々しいオーケストラの響きもシューマンの心に鳴っていたまさにその音だと言えよう。内へ内へと凝集し自らを追い詰めていくような緊張に満ちた分厚い響き。これはまさしく、苦悩するマンフレッドの姿に自らを投影した悩めるシューマンの熱く激しい心の中のざわめきなのである。——光と闇、精神と塵芥、情欲と純潔な思想、これらが入り混じって目的も秩序もなく争う恐ろしい混沌——このような精神状態が、オーケストラのうねるような音から伝わって来る。

2曲目のプロコフィエフの交響曲第1番『古典交響曲』は、シューマンとは対照的に、オーケストラの多彩な表現力を存分に活かした作品だ。「古典」という名前が示すとおり、古典派の大家ハイドンの作風を意識した、簡潔だが面白さに満ちた曲である。特殊楽器をまったく含まない2管編成という小規模なオーケストラ。短い旋律を何度も繰り返し使う単純な構造。それでいながらこの曲が聴衆を決して飽きさせない面白さを持っているのは、オーケストラの扱いがうまいからだ。同じ旋律をさまざまに楽器を代えながらリレーすることでもたらされる多彩な色彩感、推進力に満ちた鋭い伴奏音型、リズムを引き締める変拍子とシンコペーション、こうした心憎いオーケストレーションの妙味が簡潔な「古典交響曲」に快活な生命力を吹き込んでいるのである。

作曲当時プロコフィエフはまだ26歳。彼は性格の屈折した無神論者で、音楽院時代は教官たちと頻繁にいざこざを起こす生意気な学生だったらしい。そうした怖いもの知らずの若者だったからこそ、自らをハイドンに擬するという大胆不敵な作曲行為に及び、そして傑作を生み出すことに成功できたのだろう。

どんな作曲家の作品でも、青年時代の作品は円熟期の大作とはまた違った清新な魅力を持っているものである。プロコフィエフの『古典交響曲』はまさにそうした傑作だ。後年プロコフィエフは、巨大なオーケストラにピアノまで動員しグロテスクな旋律で聴衆を威圧する超弩級戦艦のような管弦楽曲を作曲しており、没後50周年にあたる今年はそうした円熟期のプロコフィエフ作品を聴く機会が増

本当のニールセン？！

カール・ニールセンという作曲家は、日本では誤解されて広まってしまった作曲家の一人だと思う。今回、交響曲第3番を取り上げる好機を得られ、それらの誤解を解くべくここに記したい。

1. そもそもニールセン？！

Nielsen と綴るのだが、カナ表記ではニルセンとのばさない方がより原語に近いようだ。

ニールセンが初めて日本に紹介された頃は、ネルソンやらネルセンと表記されていたようだが、ニールセンよりはこちらのほうが近いのだろう（原語の発音を聞いたことが無いので、確認できないが…）。今ではニールセンの名前が一番定着してしまっているようなので、以下この表記で統一させていただく。

2. ニールセンは現代作曲家？！

ニールセンが生きた 1865～1931 年という時代は、ドイツでは後期ロマン派の全盛期にも重なり、あるいは現代音楽と言われる音楽が現れ始めた時代にも重なる。音楽書などでは、「国民楽派（ロマン主義を元に、作曲家自身の国の民族的要素を取り入れて作曲した人々）」という便利な言葉でくくられているが、ニールセンに関して言えばそう簡単に分類するわけにはいかない。初期の作品こそ、国民学派としての香りを強く感じるものの、時代の流れと共に変化していったニールセンを本当に楽しむためには、粹にはまった捉え方をしていたのでは楽しめないのだ。一番お勧めしたいのは、交響曲を1番から順に6番まで聴いてみる事だ。作曲年はニールセンの生涯にほぼ均一に散らばっており、作曲技法等の移り変わりを楽しむことができる。特に、3・4・5番は戦争の時期とも重なり、要チェックだ。紙面の都合、ここに詳しく紹介できないのは残念である。

3. 交響曲第4番「不滅」？！

ニールセンで最もよく知られている曲は、おそらくこの「不滅」であろう。ところが、この副題ではちょっとニュアンスが違うのだ。原題は“The Inextinguishable”、直訳すると「消しがたきもの」あるいは「抑えきれぬもの」といったところか。皮肉にも、「運命」や「合唱」といった副題が大好きな日本人には、不滅という格好良い二文字によってニールセンの名が知れ渡る事になってしまったのであろう。

4. ニールセンの曲は標題音楽？！

ニールセンの交響曲には副題がついているものが多い。第2番「四つの気質」、第3番「エスパンシーヴァ（広がり）」、第4番「不滅」、第6番「センブリーチェ（素朴な）」。

いずれも、標題としての副題ではなく、曲全体が与える印象を言葉にしてみただけである。もっとも、第2番だけはインスピレーションを与えた絵画が実在するが…

5. Op. (オーパス=作品番号) ？！

ニールセンには確かに、作品番号がついている。が、非常に抜けが多い。番号も59までしかないのだ。それに対して、Dan Fog (フォウ) と Torben Schousboe (スコウスボー) の2人による FS 番号は157まであり、ほぼ作曲年代順に並んでいる。モーツァルトのケッヘル番号のように、FS 番号も定着して欲しいものだ。

6. その他、細かい誤解（豆知識）

・ニールセン作品の日本初演については、諸説あるのだが、交響曲第3番は6つの交響曲中、初演が最も遅い。1984年11月8日、小澤/新日本フィルとされている。ところが、ネットで調べると1983年11月29日に東京理科大が初演しているようなのだ。アマオケは初演したことにはならないのだろうか？もしこちらが初演なら、1984年2月27日に初演された交響曲第6番の方が遅いことになる。まあ、どうでもいいことだが。

・弦楽合奏の演奏会に『バッハ/ニールセン：シャコンヌ（弦楽合奏版）』という曲目をたまに見かける。C.ニールセンにもFS.79にピアノのための「シャコンヌ」という曲があるためにややこしいのだが、バッハの編曲版を書いたのはイタリアのリッカルド・ニールセンという全くの別人らしい。C.ニールセンの目録に無いので、もう一人のデンマーク人作曲家ルドルフ・ニールセンの編曲としてしまっている場合もあって、さらにややこしい。

(曲目推薦者：Vn. 西村 浩輔)

えている。それでもなお、いやそうであるからこそ、若者の生命力が炸裂したかのような『古典交響曲』のはつらつとした魅力は一層の輝きを放つに違いない。

3曲目、ニールセンの交響曲第3番のオーケストレーションはシューマンに近い。管楽器も弦楽器もべったりと重ねてしまい、非常に分厚い響きをつくっている。一見すると非常に乱暴で工夫のないオーケストレーションのように見えるかもしれないが、楽譜をよくよく検討すると、ニールセンがいかに豊かな響きをこのオーケストレーションから引き出そうとしていたのかが見えてくる。

たとえば第2楽章を見てみよう。この楽章は声楽のソロを楽器のひとつとして（歌詞はなく、母音のみで旋律を歌う）取り入れていることで名高いが、その声楽とオーケストラの絡み合う部分の音量指定が実に緻密なのだ。キャンパスの下塗りの役割をするトロンボーンや和音には *ppp* が、分散和音を伴奏する木管には *pp* が、動きを持った副旋律を歌う木管とヴァイオリンには *mp* が指定されるという階層的な音量指定がなされている。このように色合いの異なる波が幾重にも重なったかのような響きの海の彼方から、人間の声がかすかに聞こえてくるのである。

このような極めて綿密な配慮を持って、各楽章が個性豊かに描かれる。第1楽章は鋭いリズムと威圧的なフォルテが支配する攻撃的な音楽で、その中に憧憬に満ちた牧歌的な旋律やエネルギーなダンス・ミュージックが挿入された非常に密度の濃い楽章である。このような第1楽章に対比されて、第2楽章のやわらかな響きの海が一層異彩を放つ。第2楽章と第3楽章は、ともにホルンの合奏で始まりフルートの旋律によって締めくくられるという共通性を持つ。この双子のような二つの楽章にどのように表情の違いを持った音楽を展開させるか、作曲者の手腕が冴える。第4楽章は攻撃的な第1楽章と対照的な落ち着いた音楽である。ただし、非常に低音が強調されており、そのためかどこか暗さを感じさせる。冒頭はヴァイオリンのほとんど最低音域に近い音高による旋律で始まり、全曲を締めくくると最後の音にはフルートとオーボエを省いた極めて重々しい音を使っている。単なる祝祭的なフィナーレではなく、どこか不安を漂わせたフィナーレで曲を締めくくったのである。

ニールセンはこのように独創的な作曲家であるが、演奏頻度はきわめて低い。まだ芥川也寸志が司会をしていたころの『N響アワー』で「知られざる作曲家・ニールセン」という特集が組まれたことがあったが、それから10数年たった今でもニールセンが「知られざる作曲家」である状況はほとんど同じである。今回、このようにシューマンやプロコフィエフといった著名な作曲家の作品とともにニールセンも聴いていただくことで、ニールセンの“知られざる”独創性を知っていただければ幸いです。

(Tp. 遠藤 啓輔)

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ 輸入・販売・修理・調整・製作

イチイヒロキ Violin Shop

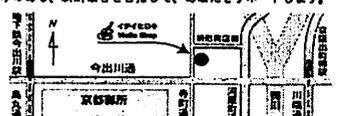
～ 音楽者をもっと知り、楽しむ人に～

- ◆ イタリア、ドイツ製ヴァイオリンなど直輸入、品質には自信のある楽器や弓を良心的価格で揃えています。まずは手にとって御試奏を。
- ◆ 弦は格安価格にて通信販売。ケースその他、特価品有り、当店はただ売るだけでなく良いものをお奨めいたします。

楽器の音色の美しさ、すどろ、しなやかさ、表現の多様性から広がっていく音の世界、イチイヒロキViolin Shopはより深みのある、新鮮な音を目指して、あなたをサポートします。

営業時間のお知らせ
am. 1:00 ~ pm. 5:00
定休日 (日・火)

- ◆ 〒600-0926 京都市上京区寺町通今出川上ル長町31
- ◆ Tel: 075-251-0724
- ◆ 携帯電話: 090-3528-0653
- ◆ e-mail: ichi@violinshop.jp



<http://violinshop.jp>

伊太利亞居酒屋

たんこくわん

Tanto Quanto

営業時間 / PM5:00 ~ AM0:00
(金・土・祝前 / PM5:00 ~ AM2:00)

京都市中京区木屋町三条下ル

tel. 231-2134

The importance of external events is not always that which common sense attributes to them. The historical knowledge we have of the events that followed the composition of the third symphony makes us see things in a different perspective than that of Nielsen at the time of composition.

We must not forget that Nielsen bore in himself both the capacity of expressing all that is said in his work, as well as the very matter which brought about the musical works he left to posterity. He was a part of mankind and thus exerted his influence in the world like other human beings facing the dilemma of good and evil in their lives. Nielsen implicitly recognized in the fourth movement that all in all the work of a manual worker is to be equally valued as the work any other human being in the grand scheme of things. Never had Nielsen stated the ideals of a social realist utopia so felicitously.

Nielsen's third symphony's universality stems indubitably from the fact that the work addresses ageless issues of concern to mankind in a positive manner. For Nielsen, the tension created by the athletic triple time propelling the "Sinfonia Espansiva" opening movement finds a completely

different outcome than the general mayhem of modern warfare that was to produce the First and Second World Wars.

In the third symphony Nielsen the poet has spoken to us of a possible world. It is now left to us to tame the awakening giant heralded by the massive chords of the symphony's first movement, and harness its wonderful energy for the better of humanity.

I wish to thank the members of the Kyoto Philomusica Orchestra for their commitment. Coming to Kyoto to make music with the Philomusica was always a joy for me, whatever the effort invested in commuting to Kyoto may have been I was always repaid a hundred times by the wonderful efforts of the orchestra on behalf of the composers.

Nobody could have wish for a better orchestra, who under the inspired leadership of its first chairs truly responded to the flow of the music and was with me at every turn. I consider myself very fortunate to have had the privilege of working with these fine musicians.

Yves Lafontaine

カール・ニールセンの第3交響曲の本質は作曲者の価値観の体現にあります。作曲者が「シンフォニア・エスパンシーヴァ (広がり)」と名づけたこの交響曲は、作曲当時の彼の世界観を反映しています。冒頭で恐ろしい巨人が目覚めますが、最後には楽観的な結末が用意されているのです。

第1楽章の冒頭から強い緊張感があり、そこから「シンフォニア・エスパンシーヴァ」という表題がつけられました。これは、古きヨーロッパ大陸での民族紛争を通して恐らく全ての人を感じていたであろう、第一次世界大戦直前の緊張感を表しています。ニールセンは、他の現代の芸術家と同様、自身の芸術によって戦争という大混乱を表現したのです。

ニールセン自身が指揮したこの曲のコンサート(1927年、コペンハーゲン)における彼自身による曲目解説に記されているように、前述の緊張感とは、非常に静けさを持つ第2楽章には全く見られません。しかし、作曲者がこのように書いているにもかかわらず、平穏で静かな第2楽章の裏に、灰のくすぶりのような緊張感が隠されていると感

じる人もいるかもしれません。ただし、この楽章は二人の歌手が自由に歌いながら非常に穏やかなムードの中で終わることに注意する必要があります。

ニールセンによれば、第3楽章は特徴づけるのは難しい楽章で、善と悪が真の結果なしに対面すると言います。それは道に迷った世界に対峙して、鏡を持つかのようです。

さらに第4楽章は、先行する3つの楽章の内容への直裁な回答です。それは、仕事、日常生活の健康的な楽しみ、日々の家事という当たり前なことへの喜び、我々の周囲が活動的で可能性に満ちていること、これらすべてへの讃歌なのです。

すべての芸術家の人生において「周囲で起きることが物事の精華である」というヴァレリーの言葉を銘記しておくことが重要です。芸術家にとってのある外部現象の重要性は、一般常識が想起する重要性とは必ずしも一致するとは限りません。我々はこの交響曲が成立した後の歴史を知っているので、ニールセンがこの曲を作曲した当時の見方とは違った見方ができるのです。

我々はニールセンが作品で表現しようとしたす

指揮者 Yves Lafontaine



イヴ・ラフォンテーヌは現在、東京ハイドン・シンフォニーエッタ芸術監督をつとめるカナダ出身のヴィルトゥオーソ。非凡な才能を持ち、クラシック音楽のあらゆるジャンルにまたがって活動をしている。ヨーロッパの名門音楽学校で学んだ後、遠藤雅古の下で、東京芸術大学で指揮を学んだはじめての外国人となった。以来、ヨーロッパ、アジア、米国において数多くのコンサートを成功させ、NHK を含むテレビやラジオに出演し、録音も多い。

こうした成功の裏には、氏が、非常に多岐にわたる芸術・文化の分野に精通しているという点がある。初期バロックからオペラ、前衛作品にまで及ぶクラシックのレパートリーに関する百科事典的ともいえるほどの知識を持ち、バイオリンや他の楽器の鑑定家としても認められている。六カ国語に堪能で、BLI(北京言語学院)のゴールドメダル受賞者でもある氏は、日本の文化・文学に関する深い研究成果のみならず、自身の詩や文学作品も出版してきた。

現在は、アジアとカナダにまたがって、コンサート、研究活動、録音、オーケストラ用編曲を行っている。オーケストラにインスピレーションを吹き込み、世界の大傑作の細やかな感情や情熱を伝える氏の能力に匹敵する指揮者を、現在どれほど見出せるのでしょうか。(文: Angus Waycott / 訳: 片山修)

— イヴ・ラフォンテーヌ氏からのメッセージ —

Carl Nielsen's third symphony is in essence an assertion of values. Christened "Sinfonia Espansiva" by the composer, this symphony reflects the general state of affairs in Nielsen's world at the time of its composition. It speaks of the awakening of a colossal giant, and wishes to give the optimistic account of a possible outcome.

The symphony expresses – namely in the first movement – a strong tension, thus the name "Sinfonia Espansiva". This tension was probably felt by all at on the eve of the First World War, as ethnic skirmishes were flaring up in old continental Europe. Nielsen, like other contemporary artists, responded to the powerful maelstrom of fate winding up the war machine of men by means of his works.

According to Nielsen's program notes for a concert he conducted in Copenhagen in 1927, and in which the third symphony was featured, the above mentioned tension has been completely eradicated by idyllic calm in the second movement. One might add that despite Nielsen's reading of

this movement's inner nature, tensions are still there, sometimes in the form smoldering ashes under the peace and quiet intended in this part of the symphony. It is however to be noticed that the movement does end in a very peaceful mood as two humane voices vocalize freely on the vowel "a".

According to Nielsen, the third movement is something that cannot be characterized easily, in that good and evil face one another without a real outcome. It is a little like holding a mirror to a world at a loss for as to what way it should go perhaps.

Still according to Nielsen, the fourth movement is a straightforward answering of the incertitude of the three preceding movements. It is a hymn to work and the healthy enjoyment of daily life, a sort of general joy in being able to participate in the work of daily living, and to see activity and capability unfold around us.

It is important to note that in the life of any artist, "the external events are the scum of things" to here quote Valery.

村上 治子様	松村 正人様	渡辺 一真様
川野 浩之様	南方 一晃様	渡辺 由加里様
岩佐 聖子様	政岡 潤平様	渡辺 晴菜様
田中 直子様	政岡 節男様	河上 由香里様
村山 義尚様	政岡 晶子様	野瀬 規子様
村上 明日香様	津田 篤太郎様	井ノ山 敏江様
渡辺 真人様	越後 千代様	井ノ山 恵理様
渡辺 和美様	西山 恵子様	小林 香様
杉本 里香様	後藤 恭子様	ほか3名様
大八木 文人様	高瀬 博章様	(2003年5月10日現在)

2002年4月に発足しました「友の会」は、現在、上記会員の皆様方よりご支援いただいております。

アンケートへの回答への回答

前回の第12回演奏会はたいへん好評だったようで、アンケートにも「素晴らしい演奏でした」「来てよかった」など、我々団員一同身に余るお褒めの言葉をたくさんいただきました。

40歳、女さん「ボーイングの高さや角度はあまりあってなかったのですが、自由なんですか？」

ボーイングの乱れは、第12回の弦楽器メンバーの大きな反省点です。もっとも現在13回へ向けての練習中ですが、本番が近づいてもボーイングがそろそろ心配がないのが恐ろしいのですが。でも、なんとか本番に向けて調整していきますのでご期待ください。

53歳、男さん「今回はマジックリスニング（ヒアリング方法）を試しての演奏会だった」

このマジックリスニングとはいかなるもののでしょうか？もし今回もこられていたら、ごく簡単に教えていただけませんか？ その方法を使うと「楽器一つずつがとてもクリアにひびいて」くるとのことですが！？

また、54歳、女、主婦さん、長文の感想文をありがとうございました。曲を聴きながら随時メモを取っていただいたのでしょうか？ 短い現場レポートを読むようで楽しめました。「ピッチカート→横ではなく、縦への音の広がりがほしい」など我々一同も納得の指摘は今後の参考にさせていただきます。

Violin shop

VIOLIN VIOLA CELLO & BOW
販売・製作・修理・調整

渡辺弦楽器工房

京都店 京都市中京区高倉裏川上ル福屋町728-4 TEL.075-211-0116
夙川店 西宮市南郷町14-10 TEL.0798-70-2006

香雲

ミニコンサート in 大原

音楽と自然の音と朗読、
そして香りが織りなす
ヒーリング世界に皆様をお招きいたします。

企画/お問い合わせ先
プランニングオフィス プロシップ
TEL/FAX:075-811-9120
<http://www.pro-ship.com/>

べて、および後世に残した音楽作品により引き起こされたこと、それらすべて、彼が生み出した事柄を忘れてはなりません。彼は人類であり、だからこそ善と悪とのジレンマに直面したほかの人々と同様にこの世界において影響を及ぼすことになったのです。ニールセンは暗黙のうちに、物事の摂理の中で、単純作業に従事する労働者すべてがほかの労働者たちと同じ価値があるということを示す第4楽章において認めているのです。ニールセンは社会の現実主義者のユートピアの理想を明快に述べたわけではありません。それでも、ニールセンの第3交響曲の普遍性は、この人類永遠の課題を扱っていることにあるのは疑いないでしょう。

ニールセンが「Sinfonia Espansiva」の扉を開く楽章で三度登場させた緊張感ある動機、これは二つの世界大戦となった近代的な戦渦による大混乱とはまったく異なる結末へと帰結しています。この曲で詩人ニールセンは、我々に来たり得る世

界について語ったのです。交響曲の最初の動機の大いなる和音によって表現された、我々が目を覚まさせてしまった巨人を、飼いならして人類にとって良い方向にその素晴らしいエネルギーを利用することが今、我々に任されているのです。

私は京都フィロムジカ管弦楽団のメンバーと演奏できることに感謝します。彼らと音楽をするために京都に来ることは私にとって常に喜びでした。京都に来るために私が費やした労力は、いつでもメンバーたちが作曲家の意図を表現しようとするすばらしい努力によって何百倍にも報われているのです。これ以上のオーケストラを望むものは誰もいません。このオーケストラは才気溢れたリーダーシップをもつ、音楽の流れと私の棒とによく反応する首席奏者たちのもとにあるのですから。私はこれらの素晴らしいミュージシャンと共に演奏できることを非常に幸運であると思います。

イヴ・ラフォンテーヌ (訳: T.S.)

印刷のことなら

大地社

〒602-0858

京都市上京区河原町通荒神口上ル二筋目東入ル

TEL (075) 231-1727(代)

FAX (075) 256-4604

サークル合宿・ゼミ旅行・スキーに
海外旅行まで、全てお任せ下さい

面倒な施設の予約から交通機関まで
一切の手続きを代行致します。



日本旅行株式会社
京都府京都市中京区西門外通2-6-4

お問い合わせは…

TEL.075-351-0405 FAX.075-371-7739

7/11-7/11 0120-040-566

e-mail fwnet@nyc.odn.ne.jp

ときめく出会いー湖西の自然
マキノ高原

みくに館 (本館)
みくに館山の家 (別館)

春から秋はテニス・各種合宿!
冬は目の前がマキノスキー場!
(京都東 I.C. から車で 75 分)

〒 520-1836

滋賀県高島郡マキノ町牧野

TEL&FAX 0740-27-1106 (本館)

TEL&FAX 0740-27-1228 (別館)

花とコーヒー

カンパニエラ
Flower and Coffee

Open 8:30am-8:00pm

Holiday Wednesday

Tel./Fax. 075-951-0362

長岡京市天神1丁目1-4 阪急長岡天神駅前

京都フィロムジカ管弦楽団

Kyoto Philomusica Orchestra

Violino	Viola	Flauto	Corno	Timpani
天澤 天二郎	小野田 靖代	江藤 佳美	芦原 俊平	永野 貴子
飯島 光一朗	河村 幸枝	加藤 勇仁	片山 真吾	
越後 美和	篠崎 淳	松村 朋美	坂口 裕志	
奥田 美抄	下川 雅弘	(Flauto piccolo)	長岡 武志	※印：客演奏者
小幡 拓也	瀬尾 倫代		野田 啓	
川島 仁子	松浦 淳司	Oboe	安田 聖	—————
川島 武士	上田 三保子※	中西 充弥	吉野 文彦	顧問
須賀 みな子		山出 涼子		和田 之宏
鈴木 佳奈	Violoncello	崗崎 いつ子※	Tromba	
田村 うらら	小川 優香	(Corno inglese)	遠藤 啓輔	団長
千熊 由紀子	奥田 真理恵		竹内 恵理	長岡 武志
中島 円	小野田 税	Clarinetto	渡辺 美智子	
Saskia Niemeyer	星 衛※	田中 慎一郎		事務
西村 浩輔		友澤 悠季※	Trombone	木下 洋輔
西村 祐司	Contrabbasso	森 健太郎※	谷口 佳隆	
磯貝 文彦※	今城 和久		宮下 秀行	コンサートマスター
井村 有里※	河原 豊	Fagotto	山下 大介	天澤 天二郎
大八木 文人※	名坂 美香	塚田 英城	近藤 孝司※	(Nielsen, Schumann)
尾崎 平※		田中 裕美子※		川島 武士
斉藤 緩※		内等 すずえ※	Tuba	(Prokofieff)
田代 直子※		林 直樹※	塚田 淳※	
富井 康宏※		(Contrafagotto)		

ソプラノ独唱 好本 由希子

京都市立芸術大学音楽学部、同大学院音楽研究科声楽専攻修了。卒業演奏会に出演。米ロチェスター大学イーストマン音楽学校セミナーに合格、選抜演奏会に出演。現在門真ルミエール混声合唱団、奈良フロイデ合唱団ボイストレーナー。

バリトン独唱 佐藤 励

2001年京都市立芸術大学卒業、同年京都新人演奏会に出演。2003 シュウベルト協会推薦ドイツ歌曲演奏会に出演。学内、関西二期会で数々のオペラに出演する。今までに蔵田裕行氏、灘井誠氏に師事。

弦トレーナー 吉野 美穂

京都市立芸大卒。ヴァイオリンを木村直子、岸辺百百雄、室内楽を種田直之、河野文昭、久合田緑の各氏に師事。

管トレーナー 山崎 雅夫

京都大学卒。京都大学交響楽団金管・打楽器トレーナー。トランペットをC. マクベス、A. ハーゼス、M. アンドレの各氏に師事。

木管トレーナー 片寄 伸也

大阪教育大学卒業。シュトゥットガルト音楽大学、トロッシンゲン音楽大学各大学院終了。現在、フリーランスのファゴット奏者として在阪のオケなどにて客演奏者を務める傍ら、ソロ・室内楽でも活躍中。

♪ 京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

♪ 第14回定期演奏会 ♪

2003年12月7日(日) 午後2時開演 京都府長岡京記念文化会館 指揮：長野 力哉
パリー／交響的変奏曲
モーツァルト／交響曲第31番『パリ』
ヴォーン・ウィリアムズ／交響曲第3番『田園交響曲』(ソプラノ：好本由希子)

♪ 新入団員随時募集中 ♪

募集パート：ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス
オーボエ、クラリネット、ファゴット、トランペット、テナー・トロンボーン

※管楽器はオーディションがあります。

※コントラバスは団所有の楽器があるため、楽器に関しては相談に応じます。

詳しくはお問合せください。

Tel. 090-8163-4626 (下川)

E-mail philo_recruit@artdam.uji.kyoto.jp

♪ 「友の会」会員随時募集中 ♪

フィロムジカの活動を応援して下さる方を募集しています。

【年会費】1口 1,000円 【期間】ご入会いただいた月より1年間

【特典】1. 期間内の定期演奏会に、1口につき1名様を無料ご招待

2. その他演奏活動のご案内

3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せは、下記までお願いいたします。

Tel&Fax 075-495-1831 (松村)

E-mail philo_tomo@artdam.uji.kyoto.jp

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ <http://www.artdam.uji.kyoto.jp/philol/>



演奏家のための
ミツマの直輸入弦楽器
直輸入でいいものを安く。
修理・調整もお任せください。
Violin Viola Cello

弦3割引

インターネットで音楽情報を！【クラシック音楽情報センター】<http://www.musicinfo.com/>

(株)ミツマ・ミュージックプロダクツ 京都・三条京阪駅前 Tel. (075)761-1213